

る。訳註として、秦簡講読会『湖北（雲夢）睡虎地秦墓竹簡 訳註初稿』（中央大学大学院論究）一〇一（一）や太田幸男『湖北睡虎地出土秦律の倉律をめぐって』その一・二『東京学芸大学紀要』第三部門・三一、三二があり、大庭脩『雲夢出土竹書秦律の研究』（関西大学文学論集）二七一（一）や堀毅『雲夢出土秦簡の基礎的研究』（『史観』九七）を併読されるのがよいと思う。

(e)は、本誌創刊号「一九七七年以前出土の木簡（一）」三重・柚井遺跡（榮原）の詳細な統報である。一九二八年に発見された柚井遺跡と、そこから日本で最初に出土した木簡について、①調査に関する新資料と、あらたに確認された二点の木簡を紹介し、②柚井遺跡は多度山の宗教行事と関連をもつ遺跡で、木簡もその宗教行事と関係をもつ、とする。日本で最初の木簡があらためて二点も確認されたのは、まことに慶賀すべき衝撃である。榮原氏の御努力に敬意を表したい。

このように、『木簡研究』第二号は学会の目的Ⅰ・Ⅱを十二分に実現しているといつてよい。おそらく広範な読者を獲得し、

学会の目的Ⅲも達成されることだろう。

そこで、最後に二・三の指摘をしておきたい。まず、コロタイプ図版に添付された釈文と(a)収録釈文を対比すると、鴨遺跡出土「刑員」木簡は(a)釈文に「分」字が一個所で脱落している。また、城山遺跡出土具注曆木簡は図版釈文校訂注「徒カ」は「徒カ」の誤植である。つぎに、031・032型式（用途の明瞭な木製品に墨書のあるもの）について木製品の種類が記載されていないものや、031・033・034型式（左右に切り込みあり）で「く」が脱落しているものがある。また、一部に凡例にない「V」（一端を尖らせたもの）や「O」（一端に孔を穿ったもの）も使用されている。「V」や「O」はわかりやすく便利な符号だと思う。第三に、本文に掲載された図や地図はできるかぎり鮮明であってほしい。また、六頁と七二頁は活版ではないようであるが、すべて統一したほうがよいのではないかと思う。なお、七頁上段五行「左京二条一坊」は「左京三条一坊」の誤植であろう。

『木簡研究』には迅速な速報性と厳密な史料性が要求されているし、また高度な研究内容も必要である。このような性格をそ

なえた『木簡研究』が、委員・幹事および発掘調査組織の御努力によって、定期的に継続して刊行されることを心から期待するものである。

『木簡研究』第二号

定価三、五〇〇円 送料 四〇〇円

申込先

〒 630 奈良市二条町二丁目九番一号

奈良国立文化財研究所

鬼頭清明 欠付 木簡学会

振替口座 京都一五二七

(B5判 一五六頁 図版七丁 一九

八〇年十一月 木簡学会 三五〇〇円)

(西山良平 京都大学文学部助手)

山本四郎編

『寺内正毅日記

一九〇〇〜一九一八』

寺内正毅は長州陸軍閥の巨頭であり、その内閣は「非立憲」で悪名高い。

さて、ここに紹介するのは、国立国会図書館憲政資料室所蔵の「寺内正毅関係文書」の中にある寺内の日記を活字にしたものである。一九〇〇年というのは寺内が参

謀本部次長（『参謀次長』）に任ぜられた年であり、一九一八年は米騒動により首相を辞任した年である。この間に寺内は陸相・朝鮮総督・首相として政治の中樞に関与したわけである。

刊本の冒頭には編者による解題が付されているが、編者のもっとも精通している時期だけに解題の内容は詳細をきわめ、各年ごとにまとめられている。日記本文で分量が多く書かれているのは、寺内の陸相時代即ち日露戦争・桂園時代である。それ以降になると欠落が目立つようになってくる。

肝心の首相時代にそれが著しく、西原借款・シベリア出兵・米騒動といった事項についての記事はなきに等しい。これは晩年の寺内が健康を害したために、記録するだけの余裕を失ったためであろう。それゆえ首相時代の日記は政治資料としては余り多くを期待できない。『原敬日記』等と併読さるべきであろう。

「あとがき」では、東京に存在する多くの根本史料の早急な公刊を訴えている。実際、この日記の公刊は、『第二次大隈内閣関係史料』（これは憲政資料室の望月小太郎にかかわる文書群を活字化したもの、一

九七九年）にひきつづき「京都女子大学研究叢刊」の一冊としてなされたものであり、つまりは一私大の財政に負ったことになるであろう。

なお使いやすさからすれば、もう少しコンパクトな製本のやり方ができなかったものかとの思いは残る。

いずれにしても、この日記の公刊はこの時期の政治史研究を大きく進めるであろう。

（Ａ５判 七五八頁 一九八〇年十二月
発行所「京都女子大学 印刷所」同朋舎
（松延秀一 京都大学大学院生

「幸徳秋水の手紙と

ノート」について訂正

本誌六三巻四号（一九八〇年七月発行）に発表した「幸徳秋水の手紙とノート」について、教人の方々から御教示を賜わった。専門外の領域で不備な点が多く申しわけない次第だが、御教示を賜わった方々に感謝し、左の三か所を訂正したい。（石田善人）

① 一〇〇ページ下段八行目

「廿載剣と書と真底の事、浩歌旦らかに和す夜濤の聲」と読下したのを、「廿載の剣書真に底事ぞ、浩歌旦つ和す夜濤の

声」に訂正、剣書はふつうは書剣と書き、書生のこと、したがってこの句は二〇年間の書生生活の慨歎を示し、一〇二ページ上段一行目の「激越な文言」という評言も改める必要がある。

② 一〇七ページ下段一行目

「俄国は我園で清国をさす」は「俄国は俄羅斯國で露西亜（ロシア）をさす」の誤まり。

なお、この演説稿については『鷹陵史学』第一号（一九七五年三月）に、狭間直樹氏が「幸徳秋水の第一回社会主義講習会における演説について」と題する紹介文で、邦語訳に詳細な注釈をつけておられることを教えられた。

③ 一二八ページ下段九行目

「対君」は「劉君」の誤まり。

「寺内内閣時代の日中関係の

一面」について訂正

本誌第六四巻第一号（一九八一年一月発行）所載の山本四郎氏の論文「寺内内閣時代の日中関係の一面」の英文レジュメ中に誤りがありますので、左のように訂正さ